都市政策・地域経済ワークショップ１　第８回　議事録

【テーマ】「現代アート入門―アートとまちづくり実践編」
【講　師】吉田有里先生　　担当教員： 吉田隆之先生
【日　時】2024 年 6 月 7 日（金）18:30～20:20
【場　所】大阪公立大学大学院　都市経営研究科　梅田サテライト　101 教室
【参加者】都市政策・地域経済コース M1 学生、公開講座にお申し込みいただいた方

■ 講義概要

吉田有里先生のこれまでのキャリアや、現在の実践などをご紹介いただきながら、「まちづくりとアートの役割」、「アートコーディネーターとはなにか、その社会的使命とは？」などについてお伺いしました。コロナ後の地域アートの可能性についてもお伺いし、参加者からの質問質に丁寧にお答えいただく中で、「アートとまちづくりの関係性」「アートコーディネーターの役割」「アートプロジェクトをはじめる際のポイント」など、認識を深める機会をいただきました。

■ 講義内容

１．講師プロフィール

名古屋芸術大学准教授／アートコーディネーター

多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程芸術学専攻修了。BankART1929 スタッフを経て、あいちトリエンナーレ 2010、2013 では、長者町エリアの担当を務め、芸術祭のまちなか展開のリーディングケースを作る。現在は、名古屋港エリアでアート活動を行う Minatomachi Art Table, Nagoya[MAT, Nagoya]、アッセンブリッジ・ナゴヤの共同ディレクターを務める。

２．現代美術を好きになったきっかけ

－中学生の時、東京都現代美術館がアメリカンコミックスを絵画にしたロイ・リキテンシュタインの「ヘアリボンの少女」を 6 億円で購入したというニュースを目にする。

－こんなマンガみたいな絵にと疑問を持ちつつ、実際に見に行ったらコンセプトを知り衝撃を受ける。

－現代アートは自分と違う価値観を知る装置。「わからないこと」を肯定していることが面白いと感じ、毎週美術館に行く。

－高校時代に様々な作品を見る中で、アーティストではなくキュレーターを目指すことを決意。現代アートの「わからない」良さを伝えるため多摩美術大学のキュレーシ

ョンコースに進む。

３．BankART1929 アシスタント時代
－銀行の跡地の利活用を目的に BankART1929 がはじまる。展覧会などを実施する他、スタジオ併設　アーティストのサポートを行う。クリエーターが集いはじめ、社交の場になっていく。
－コミュニケーションの場を作ることもアートの重要な要素と感じる。コーディネーターの仕事を通じてホスピタリティを学ぶ。
－横浜時代は街中でのアート展示を積極的に行う。

〈作品紹介：田中功起〉
・BankART NYK として活用した倉庫に残っていた不要物を素材とした船にして映像作品を作る。
・作品撮影のため、海上保安庁に交渉しにいくも許可が下りず。周辺の環境調査の一環を目的に再申請をしたところ許可される。アートのロジックだけで公共空間を使うのは難しい。許可を出しやすいように調整するのもコーディネーターの仕事と感じる。

４．あいちトリエンナーレ　アシスタントキュレーター時代
－横浜時代のまちなかでのアート活動が評価されてあいちトリエンナーレ 2010、2013 では、アシスタントキュレーターとして名古屋市長者町繊維街の担当に。
－会場確保のため 20 件以上の空き場所を見つけては展示に使わせてもらう交渉をはじめるも、そもそもトリエンナーレを知らない方がほとんど。トリエンナーレを知らない方々に説明するところからはじめる。
－プレイベントとして小さな展覧会や、住民向けの説明会を開催するなど、地域の方々と対話をしながら信頼関係を構築していった。

〈作品紹介:志村信裕〉
・繊維問屋の特徴を活かした庇をスクリーンにした映像作品で長者町ならではの屋外展示を企画。近くに飲食店も多いため、店舗への誘引も意識しながら夜間展示作品なども制作した。
・街中での夜間展示は、はじめてのことでノウハウがない。作品を展示するには街灯を消してもらう必要があるなど町の協力も必要だった。スタッフと工夫しながら、また、地域の協力を得ながら手探りで作っていった。
・志村信裕氏の作品は愛知県美術館に収蔵され、トリエンナーレで発表した作品が、

会期後にも多くの人に伝わる作品になった。

〈作品紹介: KOSUGE1-16〉:
・長者町には山車があったが戦争で喪失。お祭り時は他の町から神輿を借りて実施していた。その話を聞いたアーティストが２年かけて長者町オリジナルの山車を作成。町の歴史や武勇伝をもとに　愛知県の文化である「からくり」をつかった山車を作成。
・中小企業の社長が多い土地柄、発表当時は皆が思い思いの意見を口にしたため、地域の意見がまとまらず試走で３００ｍを走るだけで２時間かかるほど。
・「こんな山車ひとつひけなければまちづくりなどできるわけがない」というアーティスト言葉がきっかけとなり、地域が団結。みんなで練習、試走を繰り返し。お祭り当日も大成功に終わる。
・制作した山車は長者町が維持管理を行い、トリエンナーレ以降もコロナになるまで毎年お祭りで使用するほど地域に愛された。
・１つの作品が地域のコミュニケーションの促進やコミュニティの醸成に繋がった。

〈作品紹介：Nadegata　Instant　Party〉
・街中にある旧変電所跡地の建物を会場に使用しようと試みるも、会場全体を使うには用途変更をする必要があった。
・用途変更がいらない範囲の 100 ㎡のみ使用。かつて映画スタジオであったと架空のストーリーを元にした作品を建物内の 100 ㎡の回廊に展示。
・法律などの制約を逆手にとり、面白いことを提案するアーティストのすごさを感じる。

〈その他の活動〉
・ビジターセンター＆スタンドカフェ：あいちトリエンナーレの非公式プロジェクト。アーティストの青田真也と L PACK が中心に企画運営。アーティストと来場者、街の人をつなぐ社交場となった。
・トリエンナーレスクール：現代アートを勉強する場。街の方が、アーティストやボランティアの話を聞けるなど、街との接点に。現在も継続中。
・アートラボあいち：アートセンター。3 年に 1 回のトリエンナーレにおいて、会期以外の期間、地域のアーティストの作品を展示し、紹介する活動拠点。

５．Minatomachi Art Table, Nagoya[MAT, Nagoya]　共同ディレクター時代
－あいちトリエンナーレを 2 回実施後、名古屋港で港まちづくり協議会のアート事業

Minatomachi Art Table, Nagoya[MAT, Nagoya]を立ち上げる。（共同ディレクターとして青田真也（2015-現在）と野田智子（2015-2017 年まで））
－名古屋港は名古屋市民にとって心理的な距離がある場所。昔は貨物船の荷揚げ場として人流も多く、昼夜を問わず賑わう街であったが、80 年代に港の機能が移設されると同時に、衰退。空き家や空き店舗なども目立つようになる。
－2006 年にボートレースの場外発売場ボートピア名古屋ができることになるが、地域住民の反対にあう。そこで、住民と行政によるまちづくり団体「港まちづくり協議会」を発足。運営にはボートピア売上の 1 %を補助金として使用し、公園の整備や小学校の整備等、地域の活性化を行う。
－2014 年港まちづくり協議会がアートを取り入れたまちづくりを行うことになり、吉田氏が参加。2015 年、アートが街のテーブルとなり、人々が集い、交流が促される場になるようにとの想いで Minatomachi Art Table, Nagoya[MAT, Nagoya]の活動を開始する。
－MAT, Nagoya は「まちで考える、まちで受け入れる」をテーマに、アーティストが感じたアイデアをまちづくりに生かすことを目的とした活動。アートはアートとして存在しながら、アートの持つ「価値観を変えるかき混ぜる力」を活かして、街の課題考えることや、作品や活動を通じて多様性を受け入れる空気感を作ることを目指している。

[活動拠点：港まちポットラックビル]
・ポットラックとは持ち寄り、ありあわせなどの意味がある。みんなで課題や問題を持ち寄り、学び、考える場。トークイベントや展示　自由度の高いインスタレーション、スタジオプロジェクトなどを実施する他、アーティストを招聘してアーティストが作品制作の中で考え、悩むプロセスを見せる場づくりを行い、住民にアートへの理解を深める取組みを実施。
・アートの裾野を拡げるために、名古屋名物のモーニングとアーティストとのプロジェクトを合わせたイベントを展開。普段はアートイベントには来ない方もモーニングをきっかけにアーティストとのコミュニケーションが生まれる仕組みをつくる。アーティストにとっても仲間づくりや交流が生まれる場。

－現状では、多くのアーティストがアーティスト活動だけでは食べて行けず、別の職を持ちながら活動を続けている。アーティストを応援してくれる場所があるだけで活動を続けるエネルギーに変わる。アーティストを場所やネットワークの面でサポートする。アーティストを 20 年続けるのは大変。応援する環境を作り、活動をやめない人を増やすことも使命と感じている。

[現代美術のフェスティバル：アッセンブリッジ・ナゴヤ]
・街中で音楽とアートを楽しむイベント。名古屋市の文化事業の一環として 2016-2020 年まではフェスティバル、2021 年以降はアーティスト・イン・レジデンスなどの活動を行っている。既存の場所を使いたおすことをコンセプトに港まちにある水族館やスナック、船や空き家で音楽やアートやコンサートを展開。街を歩いていてアートに出会える空間作りを行う。

〈作品紹介：碓井ゆい〉
・1970 年代に保育士の労働環境を変える活動をリサーチしながら地域の方々や保育士の方と協働し作品を制作。

〈作品紹介：千葉正也〉
・空き家全体を使った作品。美術館ではできないような表現をアーティストも実験できる。

〈作品紹介：折元立身〉
・フランスパンを頭に括りつけた「パン人間」に扮したアーティストが約 30 人のおばあちゃんとご飯を食べるパフォーマンス。さまざまな時代を生き抜いてきた女性を称える。

〈プロジェクト：空き家再生スクール〉
・まちの社交場であった喫茶店 UCO が取り壊されることとなり、UCO の備品や資材をそのまま移築した NUCO として開設。移築には建築を学ぶ学生や工務店の方が有志で参加。学生のアクティブラーニングの場になる。喫茶店ＮＵＣＯは日替わり店長で運営。メンバーが変わりながらも約 10 年以上続いている。

〈その他作品〉
・スーパーでヒップホップパフォーマンス、幼稚園の体育館でノイズミュージックのライブなど、まちなかで音楽やアートを実施。
・ブロック(街区)パーティー。盆踊りとヒップホップ、ドラァグクイーンなどのカルチャーと融合して展開。見ている人より参加している人が多い状況に。－アッセンブリッジナゴヤをはじめた当初は展覧会を通じてアートを伝えることを目的にしてきたが、現在は展覧会以外の活動にも重要性を感じている。

〈プロジェクト：港まち手芸部〉
・スタジオプロジェクトに参加した宮田明日鹿さんがガラス張りのスタジオで作品を作っていた結果、手芸好きの街の人が集まってきた。参加者がお互いに教えあう手芸部をはじめる。
・従来、まちづくりに参加する人は高齢の男性が多い。時間に余裕のある方々しか参加できず、現役世代や女性が参加しにくい状況だが、港まち手芸部は 9 割が女性。まちづくりに参加していなかった女性が関わることに意味がある。
・単身の高齢者が多い街。週に 1 回集まることで地域のサロンのようなコミュニティが出来た。

〈プロジェクト：パルス〉
・10 代の居場所づくりを目的に NUCO でパルスを開始。
・福祉関連の仕事をしているアーティストが様々な環境で苦しんでいる 10 代の子どもたちがいろいろな大人と出会い、交流する場を作る。アーティストや地域の方と時間を過ごし、家族や学校だけにとらわれない多様な価値観を伝える。

〈その他活動〉
・トワイライトスクール：学童保育にアーティストを派遣して一緒に遊ぶ。外国籍の子どもたちが多いエリアなのでコミュニティのサポートにもつながる。
・パンクをテーマにした展覧会：格差社会、人種、LGBTQ などのマイノリティーの生きづらさの解消、相互扶助を考える。展覧会には自宅から外出できなかった子どもがイベントに参加し、人生のヒントを見つけるなどのエピソードも。

－港区は外国籍の居住者が多い。また、高齢化も進んでいる一方で、10 代の若者の課題が多い現状である。特にコロナ以降は、地域の人たちと接していく中で、美術を見てもらう環境を作るというよりも、生きづらさを感じている人とアーティストがアートを通じて考え、協働する場を作っていく方向にシフトしていった。
－自然発生して活動してきたことが福祉の方から評価されている。多様性を受け入れる場、居場所、みんなで作り出す場となっている。
－港まちの活動はまちの住民がアートに関われる場所であり、アーティストにとってもトライ＆エラーを出来る場所。アーティストが 0 から 1 を作るプロジェクトをスタッフであるアーティストたちがみんなで並走してサポートしていく。
－集客を評価軸にする展覧会や芸術祭とは違ったアートのありようもあるのでは？と感じている。

－作品の中には、現代アートのフォーマットからずれているものもある。今でも個人としては現代アートが大好きだが、港まちの活動はまちづくりの予算や公金を使っているのでアートの公共性といった問題意識をもってやってきた。その中で、高値で取引されるマーケットのアートと、自分が価値を感じるアートとは乖離しているとも感じている。コロナ以降はまた違う問題意識を持って、アーティストにとっても、地域の方にも有益なものをもとめて活動している。

６．質疑応答

Q）アーティストをどのように選定しているのか。

A）港まちの活動は事業ごとに選考基準を分けている。アッセンブリッジのスタジオのアーティストは公募。作品そのものの価値に加え、街に貢献してくれそうかという視点で、住民、行政、アートディレクターが選定している。展覧会やプロジェクトで招聘するアーティストは、アーティスト自身の活動に加え、作品が街や人と接点を持てそうかという視点も重要視している。アーティストと対話を重ねて作っていく。

Q）空き家の使用期間が終わった場合の対応はどのようなものか。

A）新しい空き家を探すために自ら一軒一軒調べていく。長期的に借りられるのは 30 軒あたって 1 軒あるかどうか。借りられても雨漏りなどのリスクもある。そんな時は防水協会に防水工事の技術協賛のお願いをしたこともある。私のコーディネーターとしてのクリエイティビティは「お願い」に行くこと。

Q）①公金を使う上で気を付けていることは何か。②展覧会を美術館などの箱ですることと街中ですることの違いはあるか。

A）①公金でやる以上、行政やまちに説明が必要。説明の難しさがあるが、数字も重要だが、家から出られなかった青年が展覧会を見に来たなどのエピソードを丁寧に説明し、積み重ねていくことが大切。アーティストファーストではあるが、アーティストを向きすぎるとうまく説明ができない。街中でアートを展示する以上、街のためになることは重要だが、一方で、街のためのアートをオーダーするとアーティストの表現の幅を狭めてしまう。アーティストがやっていることがまた別の形で変換されて街に還元できるようなかたちを重視している。アートは年度評価が難しい。継続していく中でアートの意味が見えてくる。継続するためにも行政にも丁寧に説明し、理解を深めてもらう働きかけをしながら進めている。

②美術館のコストが上がっている反面文化予算が減っている。チケットも高くなると限られた人にしか作品に触れることが出来なくなる。気軽にアートに触れられる場を確保することも重要。無料で見られる、アーティストが近くにいる環境を維持した

い。

Q）アーティストに場を提供したい人は多いと思う。一方で、アーティストを選定することや、マネジメントをするのは難しい。場を提供する側とアーティストを適切にマッチングさせるシクミがあれば教えてほしい。
A）アーティストと対話するにもアートの基礎的な知識やこれまでのアーティストの表現の変遷を知っておくなどのスキルがいる。きちんとアーティストの作品を見続けて、その得意な分野を活かした対応が必要で、その役割を担うのが私のようなアートコーディネーター。アーティストだけだと行政や住民を納得させることはで難しいが、コーディネーターが入ることで対応できることもある。一方でアートコーディネーターの仕事が表に見えていないことも課題。コーディネーターだけでは食べていけない現実もある。

Q）どうしたらアートセンターを運営していけるのか
A）アーティストや住民をきちんと見る、街の課題を考え、場(アートセンター)を作っていくのが自然なのかもしれない。

Q）①プロジェクトを実施する中で、アーティストの選定やスケジューリングはどのようにまとめていくのか。②MAT, Nagoya での吉田さんの役回りはどのようなものか。
A）①場所やテーマに合わせてアーティストを選ぶ、場を面白がって使ってくれそうなアーティスト、その場に合わせて作っていくアーティストなど、建物とアーティストの相性を見ながらマッチングしスケジューリングを行っていく。②街づくり協議会の会長など役付きの人や区役所の方などのニーズを聞きプログラムを作成、実施、評価する役回り。

Q）これからアートのまちづくりをはじめるにはどうすればよいか。
A）場をつくるひとがいないと始まらない。アートコーディネーター養成するのも大切。イベントもいきなりアートではなく親しみやすいものを実施していくほうがよい。

以上

（議事録作成：都市政策・地域経済コース　修士課程１年　野村仁志）